



Unified Managerを設定しています

OnCommand Unified Manager 9.5

NetApp
October 23, 2024

目次

Unified Managerを設定しています	1
設定手順の概要	1
Unified Manager Web UI にアクセスします	1
Unified Manager Web UI の初期セットアップを実行する	2
クラスタを追加する	4
Unified Manager でアラート通知を送信するための設定	6
Unified Manager に自動的に追加される EMS イベント	14
ONTAP EMS イベントに登録する	18
SAML 認証の設定を管理する	19
データベースバックアップの設定を構成しています	22
ローカルユーザのパスワードを変更しています	23
Unified Manager のホスト名を変更しています	24

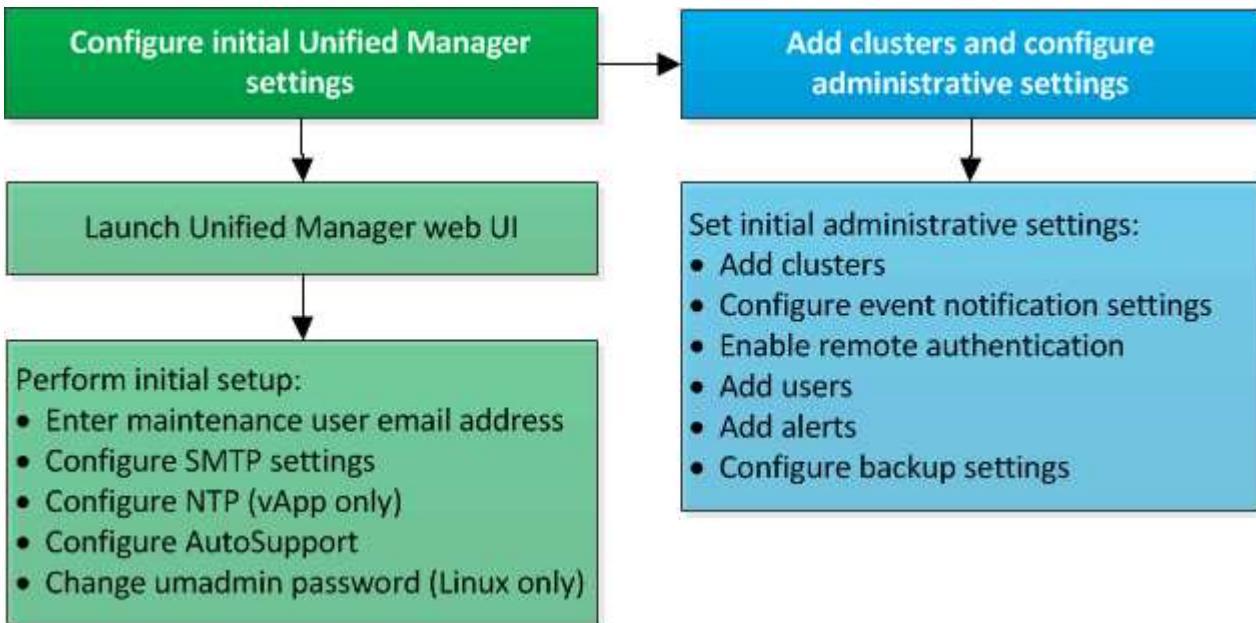
Unified Managerを設定しています

Unified Managerをインストールしたら、Web UIにアクセスするために初期セットアップ（初期設定ウィザード）を完了する必要があります。その後、クラスタの追加、リモート認証の設定、ユーザの追加、アラートの追加など、その他の設定作業を実行することができます。

このマニュアルに記載されている手順の一部は、 Unified Manager インスタンスの初期セットアップを完了するための必須の手順です。その他の手順は、新しいインスタンスをセットアップする際に推奨される設定か、または ONTAP システムの定期的な監視を開始する前に把握しておくことが推奨される設定です。

設定手順の概要

以下は、 Unified Manager を使用する前に必要な設定作業のワークフローです。



Unified Manager Web UI にアクセスします

Unified Manager をインストールしたら、ONTAP システムの監視を開始できるように、Web UI にアクセスして Unified Manager をセットアップします。

作業を開始する前に

- Web UI へのアクセスが初めての場合は、メンテナンスユーザ（Linux 環境の場合は umadmin ユーザ）としてログインする必要があります。
- 完全修飾ドメイン名（FQDN）または IP アドレスの代わりに短縮名を使用した Unified Manager へのアクセスをユーザに許可する場合は、短縮名が有効な FQDN に解決されるようにネットワークを設定する必要があります。
- 自己署名のデジタル証明書がサーバで使用されている場合、信頼されていない証明書であることを示す警告がブラウザ画面に表示されることがあります。リスクを承認してアクセスを続行するか、認証局（CA

) の署名のあるデジタル証明書をインストールしてサーバを認証します。

手順

1. インストールの完了時に表示された URL を使用して、ブラウザから Unified Manager Web UI を起動します。URL は、Unified Manager サーバの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名（FQDN）です。

リンクの形式は、<https://>です/[URL](#)。

2. メンテナンスユーザのクレデンシャルを使用して、Unified Manager Web UI にログインします。

Unified Manager Web UI の初期セットアップを実行する

Unified Managerを使用するには、NTPサーバ、メンテナンスユーザのEメールアドレス、SMTPサーバのホスト名とオプションなどを最初に設定する必要があります。

作業を開始する前に

次の作業を完了しておきます。

- インストールの完了時に表示された URL を使用して Unified Manager Web UI を起動します
- インストール時に作成したメンテナンスユーザ（Linux 環境の場合は umadmin ユーザ）の名前とパスワードを使用してログインします

このタスクについて

OnCommand Unified Managerの初期セットアップページは、Web UIへの初回アクセス時にのみ表示されます。次のページは、VMware 環境の場合のものです。

The screenshot shows the 'Email' step of the 'Setup Email & Time Settings' wizard. It includes sections for 'Maintenance User Email' (Email: admin@company.com), 'SMTP Server' (Hostname, Port 25, Username, Password, checkboxes for Use START / TLS and Use SSL), and 'NTP Server' (Host Name or IP Address: 10.11.12.13). A 'Next' button is at the bottom right.

これらのオプションのいずれかを後で変更する場合は、[管理]オプションを使用できます。[管理]オプションには、[*]をクリックしてアクセスできます *をクリックします。

手順

1. OnCommand Unified Managerの初期セットアップ*ウィンドウで、メンテナスユーザのEメールアドレス、SMTPサーバのホスト名とその他のSMTPオプション、およびNTPサーバ（VMwareの場合のみ）を入力します。次に、[* 次へ*]をクリックします。
2. AutoSupport]ページで、【Agree(同意して続行)*をクリックしてAutoSupportを有効にします。

AutoSupport コンテンツをサポートに送信するためにインターネットアクセスを提供するプロキシを指定する必要がある場合や、AutoSupportを無効にする場合は、管理オプションを使用します。

3. Red HatおよびCentOSのシステムの場合、umadminユーザのパスワードをデフォルトの「admin」から独自のパスワードに変更できます。

結果

初期セットアップのウィンドウが閉じ、Unified Manager Web UIが表示されます。Configuration / Cluster Data Sourcesページが表示され、システムにクラスタを追加できます。

クラスタを追加する

OnCommand Unified Managerにクラスタを追加して監視することができます。たとえば、クラスタの健常性、容量、パフォーマンス、構成などの情報を取得して、発生する可能性がある問題を特定して解決できるようにすることができます。

作業を開始する前に

- OnCommand 管理者またはストレージ管理者のロールが必要です。

- 次の情報が必要です。

- ホスト名またはクラスタ管理 IP アドレス

ホスト名は、Unified Manager がクラスタへの接続に使用する FQDN または短縮名です。ホスト名は、クラスタ管理 IP アドレスに解決できる必要があります。

クラスタ管理 IP アドレスは、管理用 Storage Virtual Machine (SVM) のクラスタ管理 LIF である必要があります。ノード管理 LIF を使用すると処理に失敗します。

- Data ONTAP 管理者のユーザ名とパスワード

このアカウントには、アプリケーションアクセスが `ontapi`、`_ssh`、および `_http_` に設定された `_admin_role` が必要です。

- クラスタに設定できるプロトコルのタイプ (HTTPまたはHTTPS) 、およびクラスタへの接続に使用するポート番号



NAT / ファイアウォールの背後にあるクラスタは、Unified Manager の NAT IP アドレスを使用して追加できます。接続された Workflow Automation または SnapProtect システムも NAT / ファイアウォールの背後に配置する必要があり、SnapProtect API 呼び出しでは NAT IP アドレスを使用してクラスタを識別する必要があります。

- Unified Manager の FQDN を使用して、ONTAP システムに ping を実行できる必要があります。

これを確認するには、次の ONTAP コマンドを使用します。`ping -node node_name -destination Unified_Manager_FQDN`。

- Unified Manager サーバに十分なスペースが必要です。データベースディレクトリのスペースの使用率が 90% を超えている場合、サーバにクラスタを追加することはできません。

このタスクについて

MetroCluster 構成では、ローカルクラスタとリモートクラスタの両方を追加し、クラスタを正しく設定する必要があります。

クラスタに 2 つ目のクラスタ管理 LIF を設定し、Unified Manager の各インスタンスを別々の LIF を介して接続すれば、1 つのクラスタを Unified Manager の 2 つのインスタンスで監視できます。

手順

1. 左側のナビゲーションペインで、 * Configuration > Cluster Data Sources * をクリックします。
2. [設定/クラスタデータソース]ページで、 [*追加]をクリックします。
3. [Add Cluster*]ダイアログボックスで、クラスタのホスト名またはIPアドレス、ユーザ名、パスワード、通信プロトコル、ポート番号など、必要な値を指定します。

デフォルトでは、HTTPSプロトコルとポート443が選択されます。

クラスタ管理 IP アドレスは、IPv6 から IPv4 または IPv4 から IPv6 に変更できます。次の監視サイクルが完了すると、クラスタグリッドとクラスタ設定ページに新しい IP アドレスが反映されます。

4. [Submit (送信)] をクリックします。
5. HTTPS を選択した場合は、次の手順を実行します。
 - a. [* Authorize Host* (ホストの認証*)] ダイアログボックスで、[* View Certificate* (証明書の表示)] をクリックしてクラスタに関する証明書情報を表示します。
 - b. 「* はい*」をクリックします。

Unified Manager では、クラスタが最初に追加されたときにのみ証明書がチェックされます。Unified Manager では、ONTAP に対する API 呼び出しごとに証明書がチェックされません。

証明書の期限が切れている新しいクラスタは追加できません。まずSSL証明書を更新してから、クラスタを追加する必要があります。

結果

新しいクラスタのオブジェクトがすべて検出されると（約15分後）、Unified Managerが過去15日間の履歴パフォーマンスデータの収集を開始します。これらの統計は、データの継続性収集機能を使用して収集されます。この機能では、クラスタが追加された直後から 2 週間分のクラスタのパフォーマンス情報を入手できます。データの継続性収集サイクルの完了後、デフォルトではクラスタのリアルタイムのパフォーマンスデータが 5 分ごとに収集されます。

 15 日分のパフォーマンスデータを収集すると CPU に負荷がかかるため、新しいクラスタを複数追加する場合は、データの継続性収集のポーリングが同時に多数のクラスタで実行されないように、時間差をつけて追加するようにしてください。また、データの継続性収集期間に Unified Manager を再起動すると、収集が停止し、その間のデータがパフォーマンスチャートに表示されません。

エラーメッセージが表示されてクラスタを追加できない場合は、次の問題がないかどうかを確認してください。

- 
- 2 つのシステムのクロックが同期されておらず、Unified Manager の HTTPS 証明書の開始日がクラスタの日付よりもあと日の日付になっている。NTP などのサービスを使用してクロックを同期する必要があります。
 - クラスタの EMS 通知の送信先が最大数に達しており、Unified Manager のアドレスを追加できない。デフォルトでは、クラスタで定義できる EMS 通知の送信先は 20 個までです。

Unified Manager でアラート通知を送信するための設定

Unified Manager では、環境内のイベントについて警告する通知を送信するように設定することができます。通知を送信するには、 Unified Manager のその他いくつかのオプションを設定する必要があります。

作業を開始する前に

OnCommand 管理者のロールが必要です。

このタスクについて

Unified Manager を導入して初期設定を完了したら、イベントの受信に対してアラートをトリガーし、通知 E メールや SNMP トラップを生成するように環境を設定することを検討する必要があります。

手順

1. イベント通知を設定

特定のイベントが発生したときにアラート通知を送信するには、 SMTP サーバを設定し、アラート通知の送信元の E メールアドレスを指定する必要があります。SNMP トラップを使用する場合は、該当するオプションを選択し、必要な情報を指定します。

2. リモート認証を有効にします

リモート LDAP ユーザまたは Active Directory ユーザが Unified Manager インスタンスにアクセスしてアラート通知を受信できるようにするには、リモート認証を有効にする必要があります。

3. 認証サーバを追加します

認証サーバを追加することで、認証サーバ内のリモートユーザが Unified Manager にアクセスできるようにすることができます。

4. ユーザを追加します

複数のタイプのローカルユーザまたはリモートユーザを追加し、特定のロールを割り当てることができます。アラートを作成する際に、アラート通知を受信するユーザを割り当てます。

5. アラートを追加します

通知を送信する E メールアドレスの追加、通知を受信するユーザの追加、ネットワークの設定、環境に必要な SMTP オプションと SNMP オプションの設定が完了したら、アラートを割り当てることができます。

イベント通知を設定しています

Unified Manager では、イベントが生成されたときやユーザに割り当てられたときにアラート通知を送信するように設定することができます。アラートの送信に使用する SMTP サーバを設定したり、さまざまな通知メカニズムを設定したりできます。たとえば、ア

アラート通知を E メールや SNMP トラップとして送信できます。

作業を開始する前に

次の情報が必要です。

- アラート通知の送信元 E メールアドレス

メール・アドレスは「送信されたアラート通知の送信元フィールドに表示されます」何らかの理由で E メールを配信できない場合は、この E メールアドレスが配信不能メールの受信者としても使用されます。

- SMTP サーバのホスト名、およびサーバにアクセスするためのユーザ名とパスワード
- SNMP のバージョン、トラップの送信先ホストの IP アドレス、アウトバウンドトラップポート、および SNMP トラップを設定するコミュニティ

OnCommand 管理者またはストレージ管理者のロールが必要です。

手順

- ツールバーで、*をクリックします  をクリックし、左側の[設定]メニューの[*通知]をクリックします。
- [セットアップ/通知]ページで、適切な設定を構成し、[保存]をクリックします。
 - 注： *
 - 送信元アドレスに「[OnCommand@localhost.com](#)」というアドレスが事前に入力されている場合は、すべての電子メール通知が正常に配信されるように、実際の作業用電子メールアドレスに変更する必要があります。
 - SMTP サーバのホスト名を解決できない場合は、SMTP サーバのホスト名の代わりに IP アドレス（IPv4 または IPv6）を指定できます。

リモート認証の有効化

Unified Manager サーバが認証サーバと通信できるように、リモート認証を有効にすることができます。認証サーバのユーザが Unified Manager のグラフィカルインターフェイスにアクセスしてストレージオブジェクトとデータを管理できるようになります。

作業を開始する前に

OnCommand 管理者のロールが必要です。



Unified Manager サーバは認証サーバに直接接続する必要があります。SSSD (System Security Services Daemon) や NSLCD (Name Service LDAP Caching Daemon) などのオーケルの LDAP クライアントは無効にする必要があります。

このタスクについて

リモート認証は、Open LDAP または Active Directory のいずれかを使用して有効にすることができます。リモート認証が無効になっていると、リモートユーザは Unified Manager にアクセスできません。

リモート認証は、LDAP と LDAPS (セキュアな LDAP) でサポートされます。Unified Manager では、セキ

ユーザでない通信にはポート 389、セキュアな通信にはポート 636 がデフォルトのポートとして使用されます。



ユーザの認証に使用する証明書は、X.509 形式に準拠している必要があります。

手順

- ツールバーで、*をクリックします をクリックし、左の[設定]メニューの[*認証]をクリックします。
- [* Setup/Authentication* (セットアップ/認証)]ページで、[リモート認証を有効にする]を選択します。
- [Authentication Service]フィールドで、サービスのタイプを選択し、認証サービスを設定します。

認証タイプ	入力する情報
Active Directory	<ul style="list-style-type: none">認証サーバの管理者名。次のいずれかの形式で指定します。<ul style="list-style-type: none">domainname\usernameusername@domainnameBind Distinguished Name (適切な LDAP 表記を使用)管理者パスワードベース識別名 (適切な LDAP 表記を使用)
LDAP を開きます	<ul style="list-style-type: none">バインド識別名 (適切な LDAP 表記を使用)バインドパスワードベース識別名

Active Directory ユーザの認証に時間がかかる場合やタイムアウトする場合は、認証サーバからの応答に時間がかかっている可能性があります。Unified Manager でネストされたグループのサポートを無効になると、認証時間が短縮される可能性があります。

認証サーバに Secure Connection オプションを使用する場合、Unified Manager は Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して認証サーバと通信します。

- 認証サーバを追加し、認証をテストします。
- [保存して閉じる] をクリックします。

リモート認証でのネストされたグループの無効化

リモート認証を有効にしている場合、ネストされたグループの認証を無効にすることで、リモートからの Unified Manager への認証を個々のユーザにのみ許可し、グループのメンバーは認証されないようにすることができます。ネストされたグループを無効にすると、Active Directory 認証の応答時間を短縮できます。

作業を開始する前に

- OnCommand 管理者のロールが必要です。
- ネストされたグループの無効化は、Active Directory を使用している場合にのみ該当します

このタスクについて

Unified Manager でネストされたグループのサポートを無効にすると、認証時間が短縮される可能性があります。ネストされたグループが無効になっている Unified Manager にリモートグループを追加した場合、Unified Manager で認証されるためには個々のユーザがそのリモートグループのメンバーである必要があります。

手順

- ツールバーで、*をクリックします  をクリックし、左の[設定]メニューの[*認証]をクリックします。
- [Setup/Authentication]ページで、[*Disable Nested Group Lookup]チェックボックスをオンにします。
- [保存 (Save)] をクリックします。

認証サーバを追加しています

認証サーバを追加して管理サーバでリモート認証を有効にすると、その認証サーバのリモートユーザが Unified Manager にアクセスできるようになります。

作業を開始する前に

- 次の情報が必要です。
 - 認証サーバのホスト名または IP アドレス
 - 認証サーバのポート番号
- 認証サーバのリモートユーザまたはリモートグループを管理サーバで認証できるように、リモート認証を有効にし、認証サービスを設定しておく必要があります。
- OnCommand 管理者のロールが必要です。

このタスクについて

追加する認証サーバがハイアベイラビリティ (HA) ペアを構成している（同じデータベースを使用している）場合は、パートナーの認証サーバも追加できます。これにより、いずれかの認証サーバにアクセスできない場合でも管理サーバはパートナーと通信できます。

手順

- ツールバーで、*をクリックします  をクリックし、左の[設定]メニューの[*認証]をクリックします。
- [セットアップ/認証]ページで、[管理サーバー->*認証*]をクリックします。
- [セキュアな接続認証を使用する*]オプションを有効または無効にします。

状況	操作
有効にします	<p>a. [リモート認証を有効にする] チェックボックスで、[セキュア接続を使用する*] オプションを選択します。</p> <p>b. [Authentication Servers] 領域で、[Add] をクリックします。</p> <p>c. Add Authentication Server ダイアログボックスで、サーバの認証名または IP アドレス（IPv4 または IPv6）を入力します。</p> <p>d. [ホストの認証] ダイアログボックスで、[証明書の表示] をクリックします。</p> <p>e. [証明書の表示] ダイアログボックスで、証明書の情報を確認し、[閉じる*] をクリックします。</p> <p>f. [ホストの許可] ダイアログボックスで、[はい] をクリックします。</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> i <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; font-size: 0.8em;"> Secure Connection authentication * オプションを有効にすると、Unified Manager は認証サーバと通信して証明書を表示します。Unified Manager では、セキュアな通信にはポート 636、セキュアでない通信にはポート 389 がデフォルトのポートとして使用されます。 </div> </div>
無効にします	<p>a. Enable remote authentication（リモート認証を有効にする） チェックボックスで、* Use Secure Connection *（セキュア接続を使用する） オプションをオフにします</p> <p>b. [Authentication Servers] 領域で、[Add] をクリックします。</p> <p>c. [Add Authentication Server] ダイアログボックスで、サーバのホスト名または IP アドレス（IPv4 または IPv6）、およびポートの詳細を指定します。</p> <p>d. [追加（Add）] をクリックします。</p>

追加した認証サーバが Servers 領域に表示されます。

4. 認証テストを実行し、追加した認証サーバでユーザを認証できることを確認します。

認証サーバの設定をテストする

認証サーバの設定を検証して、管理サーバが認証サーバと通信できるかどうかを確認できます。設定を検証するには、認証サーバからリモートユーザまたはリモートグループを検索し、設定済みの設定を使用して認証します。

作業を開始する前に

- リモートユーザまたはリモートグループを Unified Manager サーバで認証できるように、リモート認証を有効にし、認証サービスを設定しておく必要があります。
- 認証サーバからリモートユーザまたはリモートグループを管理サーバで検索して認証できるように、認証サーバを追加しておく必要があります。
- OnCommand 管理者のロールが必要です。

このタスクについて

認証サービスが Active Directory に設定されている場合に、認証サーバのプライマリグループに属するリモートユーザの認証の検証では、認証結果にプライマリグループに関する情報は表示されません。

手順

- ツールバーで、*をクリックします  をクリックし、左の[設定]メニューの[*認証]をクリックします。
- [* Setup/Authentication]ページで、[* Test Authentication*]をクリックします。
- [ユーザーのテスト*]ダイアログボックスで、リモートユーザーのユーザー名とパスワード、またはリモートグループのユーザー名を指定し、[テスト]をクリックします。

リモートグループを認証する場合、パスワードは入力しないでください。

ユーザを追加する

管理/ユーザページを使用して、ローカルユーザまたはデータベースユーザを追加できます。また、認証サーバに属するリモートユーザやリモートグループを追加することもできます。追加したユーザにロールを割り当てることで、ユーザはロールの権限に基づいて Unified Manager でストレージオブジェクトやデータを管理したり、データベースのデータを表示したりできます。

作業を開始する前に

- OnCommand 管理者のロールが必要です。
- リモートのユーザまたはグループを追加する場合は、リモート認証を有効にし、認証サーバを設定しておく必要があります。
- SAML 認証を設定して、グラフィカルインターフェイスにアクセスするユーザをアイデンティティプロバイダ（IdP）で認証する場合は、これらのユーザが「「morte」ユーザとして定義されていることを確認します。

SAML 認証が有効になっている場合、「ローカル」または「メンテナンス」タイプのユーザーに UI へのアクセスは許可されません。

このタスクについて

Windows Active Directory からグループを追加した場合は、ネストされたサブグループが無効になっていないかぎり、すべての直接メンバーとネストされたサブグループは Unified Manager で認証できます。OpenLDAP またはその他の認証サービスからグループを追加した場合は、そのグループの直接のメンバーだけが Unified Manager で認証されます。

手順

1. ツールバーで、 をクリックします  をクリックし、左の【管理】メニューの【*ユーザー】をクリックします。
 2. 【* Management/Users*】(管理/ユーザー*) ページで、【*追加】をクリックします。
 3. 【ユーザーの追加*】ダイアログボックスで、追加するユーザーのタイプを選択し、必要な情報を入力します。
- 必要なユーザ情報を入力するときは、そのユーザに固有の E メールアドレスを指定する必要があります。複数のユーザで共有している E メールアドレスは指定しないでください。
4. 【追加 (Add)】をクリックします。

アラートの追加

特定のイベントが生成されたときに通知するようにアラートを設定できます。アラートは、単一のリソース、リソースのグループ、または特定の重大度タイプのイベントについて設定することができます。通知を受け取る頻度を指定したり、アラートにスクリプトを関連付けたりできます。

作業を開始する前に

- ・ イベントが生成されたときに Unified Manager サーバからユーザに通知を送信できるように、通知に使用するユーザの E メールアドレス、SMTP サーバ、SNMP トラップホストなどを設定しておく必要があります。
- ・ アラートをトリガーするリソースとイベント、および通知するユーザのユーザ名または E メールアドレスを確認しておく必要があります。
- ・ イベントに基づいてスクリプトを実行する場合は、Management/Scripts ページを使用して Unified Manager にスクリプトを追加しておく必要があります。
- ・ OnCommand 管理者またはストレージ管理者のロールが必要です。

このタスクについて

イベントを受け取った後は、イベントの詳細ページから直接アラートを作成できます。また、ここで説明する構成/アラートページからアラートを作成することもできます。

手順

1. 左側のナビゲーションペインで、構成>【*警告*】をクリックします。
2. 【設定/アラート】ページで、【*追加】をクリックします。
3. 【* アラートの追加 *】ダイアログボックスで、【* 名前 *】をクリックし、アラートの名前と概要を入力します。

4. [* リソース] をクリックし、アラートに含めるリソースまたはアラートから除外するリソースを選択します。

[* 次を含む名前 (* Name Contains)] フィールドでテキスト文字列を指定してフィルタを設定し、リソースのグループを選択できます。指定したテキスト文字列に基づいて、フィルタルールに一致するリソースのみが使用可能なリソースのリストに表示されます。指定するテキスト文字列では、大文字と小文字が区別されます。

あるリソースが対象に含めるルールと除外するルールの両方に該当する場合は、除外するルールが優先され、除外されたリソースに関連するイベントについてはアラートが生成されません。

5. [*Events] をクリックし、アラートをトリガーするイベント名またはイベントの重大度タイプに基づいてイベントを選択します。



複数のイベントを選択するには、Ctrl キーを押しながら選択します。

6. [*Actions] をクリックし、通知するユーザを選択し、通知頻度を選択し、SNMP トラップをトラップレシーバに送信するかどうかを選択し、アラートが生成されたときに実行するスクリプトを割り当てます。



ユーザに対して指定されている E メールアドレスを変更し、アラートを再び開いて編集しようとすると、変更した E メールアドレスが以前に選択したユーザにマッピングされていないため、名前フィールドは空白になります。また、[Management/Users] ページで選択したユーザのEメールアドレスを変更しても、変更後のEメールアドレスは更新されません。

SNMP トラップを使用してユーザに通知することもできます。

7. [保存 (Save)] をクリックします。

アラートの追加例

この例は、次の要件を満たすアラートを作成する方法を示しています。

- アラート名 : HealthTest
- リソース : 名前に「abc」が含まれるすべてのボリュームを対象に含め、名前に「xyz」が含まれるすべてのボリュームを対象から除外する
- イベント : 健全性に関するすべての重大なイベントを含みます
- アクション: 「[sample@domain.com](#)」、「Test」スクリプトを含み、15分ごとにユーザーに通知する必要があります

[Add Alert] ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

- [名前]をクリックし、と入力します HealthTest [アラート名] フィールドに入力します。
- [* リソース] をクリックし、[含める] タブで、ドロップダウン・リストから [* ボリューム] を選択します。
 - 入力するコマンド abc 「* Name contains *」 フィールドには、名前に「abc」が含まれるボリュームが表示されます。
 - [使用可能なリソース (Available Resources)] 領域から [<リソース (<<All Volumes whose name contains 'abc'> >)] を選択し、[選択したリソース (Selected Resources)] 領域に移動する。

- c. [除外する]をクリックし、と入力します xyz [名前に*が含まれています]フィールドで、[*追加]をクリックします。
3. [* イベント]をクリックし、【 イベントの重要度 】フィールドから【 クリティカル *】を選択します。
4. [Matching Events] 領域から [*All Critical Events] を選択し、[Selected Events] 領域に移動します。
5. [アクション]をクリックし、と入力します sample@domain.com [これらのユーザーにアラートを送信]フィールドに入力します。
6. 15 分ごとにユーザに通知するには、「* 15 分ごとに通知する」を選択します。

指定した期間、受信者に繰り返し通知を送信するようにアラートを設定できます。アラートに対してイベント通知をアクティブにする時間を決める必要があります。

7. 実行するスクリプトの選択メニューで、*テスト*スクリプトを選択します。
8. [保存 (Save)] をクリックします。

Unified Manager に自動的に追加される EMS イベント

Unified Manager 9.4以降のソフトウェアを使用している場合、次のONTAP EMSイベントがUnified Managerに自動的に追加されます。これらのイベントは、Unified Managerが監視しているいずれかのクラスタでトリガーされると生成されます。

ONTAP 9.5 以降のソフトウェアを実行しているクラスタの監視では、次の EMS イベントを使用できます。

Unified Manager のイベント名	EMS のイベント名	影響を受けるリソース	ONTAP の重大度
アグリゲートの再配置でオブジェクトストアへのアクセスが拒否されました	arl.netra.ca.check.failed	アグリゲート	エラー
ストレージフェイルオーバー時にアグリゲートの再配置でオブジェクトストアへのアクセスが拒否されました	gb.netra.ca.check.failed	アグリゲート	エラー
FabricPool スペースがほぼフルです	fabricpool.Nearly_full	クラスタ	エラー
NVMe の猶予期間 - 開始されました	nvmf.graceperiod.start	クラスタ	警告
NVMe の猶予期間 - アクティブ	nvmf.graceperiod.active	クラスタ	警告
NVMe の猶予期間 - 終了	nvmf.graceperiod.expired	クラスタ	警告

Unified Manager のイベント名	EMS のイベント名	影響を受けるリソース	ONTAP の重大度
LUN が破棄されました	lun.destroy	LUN	情報
Cloud AWS メタデータ接続エラー	Cloud.AWS- メタデータの接続に失敗しました	ノード	エラー
Cloud AWS IAM クレデンシャルが期限切れです	Cloud.AWS.iamCredsExpired	ノード	エラー
Cloud AWS IAM クレデンシャルが無効です	Cloud.AWS.iamCredsInvalid	ノード	エラー
Cloud AWS IAM クレデンシャルが見つからない	Cloud.AWS.iamCredsNotFound	ノード	エラー
Cloud AWS IAM クレデンシャルが初期化されていない	Cloud.AWS.iamNotInitialized	ノード	情報
Cloud AWS IAM ロールが無効です	Cloud.AWS.iamRoleInvalid	ノード	エラー
Cloud AWS IAM ロールが見つからない	Cloud.AWS.iamRoleNotFound	ノード	エラー
オブジェクトストアのホスト解決不可	objstor.host.unresolvable	ノード	エラー
オブジェクトストアのクラスタ間LIFが停止しました	objstore.interclusterlifDown	ノード	エラー
要求とオブジェクトストアシグネチャの不一致	OSC.signatureMismatch	ノード	エラー
NFSv4 プールの 1 つを使い果たしました	Nblade.nfsV4PoolExhaust	ノード	重要
QoS 監視メモリの最大化	QoS .monitor.memory.maxed	ノード	エラー
QoS 監視メモリの縮小	QoS .monitor.memory.abated	ノード	情報

Unified Manager のイベント名	EMS のイベント名	影響を受けるリソース	ONTAP の重大度
NVMe ネームスペースを破棄します	NVMeNS.destroy	ネームスペース	情報
NVMeNS Online	NVMe ネームスペースオンライン	ネームスペース	情報
NVMeNS はオフラインです	NVMe ネームスペースオンライン	ネームスペース	情報
NVMe ネームスペーススペース不足です	NVMe ネームスペース不足です。スペース不足です	ネームスペース	警告
同期レプリケーションが同期されていません	sms.status.out.out.out.sync	SnapMirror 関係	警告
同期レプリケーションがリストアされました	sms.status.in.sync	SnapMirror 関係	情報
同期レプリケーションの自動再同期に失敗しました	sms.resync.attempt。失敗しました	SnapMirror 関係	エラー
多数の CIFS 接続	Nblade.cifsManyAths	SVM	エラー
最大 CIFS 接続数を超えるました	Nblade.cifsMaxOpenSameFile	SVM	エラー
ユーザあたりの最大 CIFS 接続数を超えるました	Nblade.cifsMaxSessPerUserConn	SVM	エラー
CIFS NetBIOS 名が競合しています	Nblade.cifsNbNameConflict になっています	SVM	エラー
存在しない CIFS 共有に対して試行します	Nblade.cifsNoPrivShare	SVM	重要
CIFS シャドウコピー処理に失敗しました	cifs.shadowcopy.failure	SVM	エラー
AV サーバがウィルスを検出しました	Nblad.vscanVirusDetected	SVM	エラー

Unified Manager のイベント名	EMS のイベント名	影響を受けるリソース	ONTAP の重大度
ウィルススキャン用の AV サーバ接続がありません	Nbladen.vscanNoScanner Conn	SVM	重要
AV サーバが登録されていません	Nbladet.vscanNoRegdScanner	SVM	エラー
応答する AV サーバ接続がありません	Nbladet.vscanConnInactive	SVM	情報
AV サーバがビジーのため新しいスキャン要求の受け入れ不可	Nbladet.vscanConnBackPressure です	SVM	エラー
権限のないユーザが AV サーバへのアクセスを試みました	Nblad.vscanBadUserPriv Access	SVM	エラー
FlexGroup コンステイチュエントのスペースに問題あり	flexgroup コンステイチュエント .have .spac 確保 問題	ボリューム	エラー
FlexGroup コンステイチュエントのスペースステータスはすべて正常です	flexgroup コンステイチュエント。 spac 確保 。 status.all.ok	ボリューム	情報
FlexGroup 構成要素の inode に問題があります	flexgroup.constituents.have.inodes.issues	ボリューム	エラー
FlexGroup コンステイチュエントの inode ステータスはすべて正常です	flexgroup.constituents.inodes.status.all.ok	ボリューム	情報
ボリューム論理スペースはほぼフルです	monitor.vol.nearFull	ボリューム	警告
ボリューム論理スペースはフルです	monitor.vol. full	ボリューム	エラー
ボリューム論理スペースは正常な状態です	monitor.vol.one.OK	ボリューム	情報
WAFL ボリュームのオートサイズが失敗しました	wafl.vol.autoSize.fail	ボリューム	エラー

Unified Manager のイベント名	EMS のイベント名	影響を受けるリソース	ONTAP の重大度
WAFL ボリュームのオートサイズ完了	wafl.vol.autoSize.done	ボリューム	情報

ONTAP EMS イベントに登録する

ONTAP ソフトウェアがインストールされているシステムで生成された Event Management System (EMS ; イベント管理システム) イベントを受け取るように登録することができます。一部の EMS イベントは Unified Manager に自動的に報告されますが、それ以外の EMS イベントは登録している場合にのみ報告されます。

作業を開始する前に

Unified Manager にすでに自動的に追加されている EMS イベントには登録しないでください。同じ問題のイベントを 2 つ受信すると原因で混乱する可能性があります。

このタスクについて

EMS イベントはいくつでも登録できます。登録したすべてのイベントが検証され、検証済みのイベントだけが Unified Manager で監視しているクラスタに適用されます。ONTAP 9 EMS イベントカタログ _ は、指定したバージョンの ONTAP 9 ソフトウェアのすべての EMS メッセージに関する詳細情報を提供します。該当するイベントの一覧については、ONTAP 9 製品ドキュメントページで該当するバージョンの _EMS イベントカタログを参照してください。

"ONTAP 9 製品ライブラリ"

登録した ONTAP EMS イベントにアラートを設定したり、それらのイベントに対して実行するカスタムスクリプトを作成したりできます。

 登録した ONTAP EMS イベントが届かない場合は、クラスタの DNS 設定が含まれている問題で、クラスタから Unified Manager サーバに到達できなくなっていることが考えられます。クラスタ管理者はこの問題を解決するために、クラスタの DNS 設定を修正してから Unified Manager を再起動する必要があります。これにより、保留中の EMS イベントが Unified Manager サーバにフラッシュされます。

手順

- 左側のナビゲーションペインで、* Configuration > Manage Events *をクリックします。
- [Configuration/Manage Events]ページで、[Subscribe to EMS events]ボタンをクリックします。
- [*Subscribe to EMS events]ダイアログボックスに、登録するONTAP EMSイベントの名前を入力します。

登録可能なEMSイベントの名前を確認するには、ONTAP クラスタシェルでを使用します `event route show` コマンド (ONTAP 9より前) または `event catalog show` コマンド (ONTAP 9以降) 。

["OnCommand Unified Manager / Active IQ Unified Manager でONTAP EMSイベントサブスクリプションを設定する方法"](#)

4. [追加 (Add)] をクリックします。

EMS イベントはサブスクライブされた EMS イベントのリストに追加されますが、該当する [To Cluster] 列には、追加した EMS イベントのステータスが「Unknown」と表示されます。

5. Save and Close * をクリックして、EMS イベントサブスクリプションをクラスタに登録します。
6. もう一度 [* EMS イベントをサブスクライブ *] をクリックします。

追加した EMS イベントの [Applicable to Cluster] 列には、ステータス「Yes」が表示されます。

ステータスが「はい」でない場合は、ONTAP EMS イベント名のスペルを確認します。入力した名前に間違いがある場合は、そのイベントを削除して追加し直す必要があります。

完了後

ONTAP の EMS イベントが発生すると、イベントが Events ページに表示されます。イベントを選択すると、EMS イベントに関する詳細をイベントの詳細ページで確認できます。イベントの処理を管理したり、イベントのアラートを作成したりすることもできます。

SAML 認証の設定を管理する

リモート認証の設定が完了したら、Security Assertion Markup Language (SAML) 認証を有効にして、Unified Manager の Web UI にアクセスするリモートユーザをセキュアなアイデンティティプロバイダ (IdP) で認証するように設定できます。

SAML 認証を有効にしたあとで Unified Manager のグラフィカルユーザインターフェイスにアクセスできるのはリモートユーザのみです。ローカルユーザとメンテナスユーザは UI にアクセスできません。この設定は、メンテナスコンソールにアクセスするユーザには影響しません。

アイデンティティプロバイダの要件

すべてのリモートユーザについてアイデンティティプロバイダ (IdP) を使用して SAML 認証を実行するように Unified Manager で設定するときは、Unified Manager に正しく接続できるように、いくつかの必要な設定を確認しておく必要があります。

Unified Manager の URI とメタデータを IdP サーバに入力する必要があります。この情報は、Unified Manager の SAML 認証ページからコピーできます。Unified Manager は、Security Assertion Markup Language (SAML) 標準のサービスプロバイダ (SP) とみなされます。

サポートされている暗号化標準

- Advanced Encryption Standard (AES) : AES-128 および AES-256
- Secure Hash Algorithm (SHA) : SHA-1 および SHA-256

検証済みのアイデンティティプロバイダ

- Shibboleth
- Active Directory フェデレーションサービス (ADFS)

ADFS の設定要件

- 3つの要求ルールを次の順序で定義する必要があります。これらは、この証明書利用者信頼エントリに対する ADFS SAML 応答を Unified Manager で解析するために必要です。

要求規則	値
Sam - アカウント名	名前 ID
Sam - アカウント名	urn : OID : 0.9.2342.19200300.100.1.1
トークングループ—修飾されていない名前	urn : OID : 1.3.6.1.4.1.5923.1.5.1.1

- 認証方法を「フォーム認証」に設定する必要があります。設定しないと、Internet Explorerを使用しているユーザがUnified Managerからログアウトするときにエラーが表示されることがあります。次の手順を実行します。
 - ADFS 管理コンソールを開きます。
 - 左側のツリー・ビューで [Authentication Policies] フォルダをクリックします
 - 右の [アクション] で、[グローバルプライマリ認証ポリシーの編集] をクリックします。
 - インターネット認証方式をデフォルトの「Windows 認証」ではなく「フォーム認証」に設定します。
- Unified Manager のセキュリティ証明書が CA 署名証明書の場合、IdP 経由でのログインが拒否されることがあります。この問題を解決する方法は 2 つあります。
 - 次のリンクの手順に従って、CA 証明書チェーンの関連する証明書利用者についての ADFS サーバでの失効チェックを無効にします。<http://www.torivar.com/2016/03/22/adfs-3-0-disable-revocation-check-windows-2012-r2/>
 - ADFS サーバ内にある CA サーバで Unified Manager サーバ証明書要求に署名します。

その他の設定要件

- Unified Manager のクロックスキューは 5 分に設定されているため、IdP サーバと Unified Manager サーバの時間の差が 5 分を超えないようにします。時間の差が 5 分を超えると認証が失敗します。
- ユーザがInternet Explorerを使用してUnified Managerにアクセスしようとすると、「* the website cannot display the page」というメッセージが表示されることがあります。このような場合は、これらのユーザーが Tools > Internet Options > Advanced *の「Show friendly HTTP error messages」オプションの選択を解除していることを確認してください。

SAML 認証の有効化

Security Assertion Markup Language (SAML) 認証を有効にして、Unified Manager の Web UI にアクセスするリモートユーザをセキュアなアイデンティティプロバイダ (IdP) で認証するように設定できます。

作業を開始する前に

- リモート認証を設定し、正常に実行されることを確認しておく必要があります。
- OnCommand 管理者ロールが割り当てられたリモートユーザまたはリモートグループを少なくとも1つ作成しておく必要があります。
- アイデンティティプロバイダ（IdP）が Unified Manager でサポートされ、設定が完了している必要があります。
- IdP の URL とメタデータが必要です。
- IdP サーバへのアクセスが必要です。

このタスクについて

Unified Manager で SAML 認証を有効にしたあと、Unified Manager サーバのホスト情報を使用して IdP を設定するまでは、ユーザはグラフィカルユーザインターフェイスにアクセスできません。そのため、設定プロセスを開始する前に、両方の接続を完了できるように準備しておく必要があります。IdP の設定は、Unified Manager の設定前にも設定後にも実行できます。

SAML 認証を有効にしたあとで Unified Manager のグラフィカルユーザインターフェイスにアクセスできるのはリモートユーザのみです。ローカルユーザとメンテナンスユーザは UI にアクセスできません。この設定は、メンテナンスコンソール、Unified Manager コマンド、ZAPI にアクセスするユーザには影響しません。



このページで SAML の設定を完了すると、Unified Manager が自動的に再起動されます。

手順

- ツールバーで、*をクリックします *をクリックし、左の[設定]メニューの[*認証]をクリックします。
- [* Setup/Authentication]ページで[* SAML Authentication*]タブを選択します。
- Enable SAML authentication * チェックボックスをオンにします。

IdP の接続の設定に必要なフィールドが表示されます。

- IdP の URI と Unified Manager サーバを IdP に接続するために必要な IdP メタデータを入力します。

IdP サーバに Unified Manager サーバから直接アクセスできる場合は、IdP の URI を入力したあとに「* IdP メタデータの取得」ボタンをクリックすると、IdP のメタデータフィールドに自動的に値が入力されます。

- Unified Manager のホストメタデータ URI をコピーするか、メタデータを XML テキストファイルに保存します。

この情報を使用して IdP サーバを設定できます。

- [保存 (Save)]をクリックします。

設定を完了して Unified Manager を再起動するかどうかの確認を求めるメッセージボックスが表示されます。

- [確認してログアウト*]をクリックすると、Unified Manager が再起動します。

結果

許可されたリモートユーザが Unified Manager のグラフィカルインターフェイスにアクセスする際にクレデンシャルを入力するページが、次回から Unified Manager のログインページではなく IdP のログインページに変わります。

完了後

まだ完了していない場合は、IdP にアクセスし、Unified Manager サーバの URI とメタデータを入力して設定を完了します。

アイデンティティプロバイダに ADFS を使用している場合は、Unified Manager GUI で ADFS のタイムアウトが考慮されず、Unified Manager のセッションタイムアウトに達するまでセッションが続行されます。Unified ManagerをWindows、Red Hat、またはCentOSに導入している場合は、次のUnified Manager CLIコマンドを使用してGUIのセッションタイムアウトを変更できます。um option set absolute.session.timeout=00:15:00このコマンドを実行すると、Unified ManagerのGUIのセッションタイムアウトが15分に設定されます。

データベースバックアップの設定を構成しています

Unified Managerのデータベースバックアップ設定で、データベースのバックアップパス、保持数、およびバックアップスケジュールを設定できます。日単位または週単位のスケジュールされたバックアップを有効にすることができますデフォルトでは、スケジュールされたバックアップは無効になっています。

作業を開始する前に

- ・オペレータ、OnCommand 管理者、またはストレージ管理者のロールが必要です。
- ・バックアップパスとして定義する場所に 150GB 以上の利用可能なスペースが必要です。

Unified Manager ホストシステムとは別のリモートの場所を使用することを推奨します。

- ・Unified ManagerをLinuxシステムにインストールしている場合は、「jboss」ユーザにバックアップディレクトリへの書き込み権限が割り当てられていることを確認してください。
- ・新しいクラスタの追加後にUnified Managerで15日分の履歴パフォーマンスデータを収集している間は、バックアップ処理を実行しないようにスケジュールしてください。

このタスクについて

初回のバックアップではフルバックアップが実行されるため、2回目以降のバックアップよりも時間がかかります。フルバックアップは1GBを超えることもあり、3~4時間かかる場合があります。2回目以降のバックアップは増分バックアップとなり、所要時間は短くなります。

手順

1. ツールバーで、をクリックします  *をクリックし、Management > Database Backup *をクリックします。
2. [管理/データベース・バックアップ]ページで、[アクション>*データベース・バックアップ設定*]をクリック

クします。

3. バックアップパスと保持数の値を設定します。

保持数のデフォルト値は 10 です。バックアップを無制限に作成する場合は 0 に設定します。

4. [スケジュール頻度] セクションで、[有効化] チェックボックスをオンにし、日次または週次スケジュールを指定します。

◦ * 毎日 *

このオプションを選択する場合は、バックアップを作成する時刻を24時間形式で入力する必要があります。たとえば、18：30と指定すると、毎日午後6：30にバックアップが作成されます。

◦ * 毎週 *

このオプションを選択する場合は、バックアップを作成する時刻と曜日を指定する必要があります。たとえば、曜日を月曜日、時刻を16：30と指定すると、毎週月曜日の午後4：30にバックアップが作成されます。

5. [保存して閉じる] をクリックします。

ローカルユーザのパスワードを変更しています

潜在的なセキュリティリスクを回避するために、ローカルユーザのログインパスワードを変更することができます。

作業を開始する前に

ローカルユーザとしてログインする必要があります。

このタスクについて

リモートユーザーとメンテナンスユーザーのパスワードについては、この手順では変更できません。リモートユーザーのパスワードを変更するには、パスワード管理者に問い合わせてください。メンテナンスユーザーのパスワードを変更する手順については、を参照してください "[メンテナンスコンソールを使用する](#)"。

手順

1. Unified Manager にログインします。
2. トップ・メニュー・バーで、ユーザー・アイコンをクリックし、* パスワードの変更 * をクリックします。

リモートユーザーの場合、* パスワードの変更 * オプションは表示されません。

3. [パスワードの変更*]ダイアログボックスで、現在のパスワードと新しいパスワードを入力します。
4. [保存 (Save)] をクリックします。

完了後

Unified Manager がハイアベイラビリティ構成の場合は、セットアップのもう一方のノードでパスワードを変更する必要があります。パスワードは両方のインスタンスで同じである必要があります。

Unified Manager のホスト名を変更しています

必要に応じて、 Unified Manager をインストールしたシステムのホスト名をあとから変更することができます。たとえば、タイプ、ワークグループ、監視対象のクラスタグループなどがわかるような名前に変更すると、 Unified Manager サーバを識別しやすくなります。

ホスト名を変更する手順は、 Unified Manager を VMware ESXi サーバ、 Red Hat Linux サーバまたは CentOS Linux サーバ、 Microsoft Windows サーバのいずれで実行しているかによって異なります。

Unified Manager 仮想アプライアンスのホスト名を変更する

ネットワークホストの名前は、 Unified Manager 仮想アプライアンスの導入時に割り当てられます。このホスト名は導入後に変更することができます。ホスト名を変更する場合は、 HTTPS 証明書も再生成する必要があります。

作業を開始する前に

このタスクを実行するには、 Unified Manager にメンテナンスユーザとしてログインするか、 OnCommand 管理者ロールが割り当てられている必要があります。

このタスクについて

Unified Manager Web UI には、ホスト名（またはホストの IP アドレス）を使用してアクセスできます。導入時に静的 IP アドレスを使用してネットワークを設定した場合は、指定したネットワークホストの名前を使用します。DHCP を使用してネットワークを設定した場合は、 DNS からホスト名を取得します。DHCP または DNS が適切に構成されていない場合、ホスト名 OnCommand が自動的に割り当てられ、セキュリティ証明書に関連付けられます。

ホスト名を変更した場合、 Unified Manager Web UI へのアクセスに新しいホスト名を使用するには、ホスト名の元の割り当て方法に関係なく、必ず新しいセキュリティ証明書を生成する必要があります。

ホスト名ではなくサーバの IP アドレスを使用して Web UI にアクセスする場合は、ホスト名を変更したときに新しい証明書を生成する必要はありません。ただし、証明書のホスト名が実際のホスト名と同じになるように証明書を更新することを推奨します。

Unified Manager でホスト名を変更した場合は、 OnCommand Workflow Automation （ WFA ）でホスト名を手動で更新する必要があります。ホスト名は WFA では自動的に更新されません。

新しい証明書は、 Unified Manager 仮想マシンを再起動するまで有効になりません。

手順

1. [HTTPS セキュリティ証明書を生成する](#)

新しいホスト名を使用して Unified Manager Web UI にアクセスする場合は、HTTPS 証明書を再生成して新しいホスト名に関連付ける必要があります。

2. Unified Manager 仮想マシンを再起動します

HTTPS 証明書を再生成したら、Unified Manager 仮想マシンを再起動する必要があります。

HTTPS セキュリティ証明書の生成

別の認証局の署名を使用する場合や現在のセキュリティ証明書の期限が切れた場合など、さまざまな理由で新しいHTTPSセキュリティ証明書を生成することができます。新しい証明書で既存の証明書が置き換えられます。

作業を開始する前に

OnCommand 管理者のロールが必要です。

このタスクについて

Unified Manager Web UI にアクセスできない場合は、メンテナンスコンソールを使用して同じ値で HTTPS 証明書を再生成できます。

手順

- ツールバーで、 をクリックします  をクリックし、*設定*メニューから HTTPS証明書*をクリックします。
- [* HTTPS 証明書の再生成 *] をクリックします。

HTTPS 証明書の再生成ダイアログボックスが表示されます。

- 証明書を生成する方法に応じて、次のいずれかのオプションを選択します。

状況	手順
現在の値で証明書を再生成します	[現在の証明書属性を使用して再生成 (Regenerate using current Certificate Attributes)] オプションをクリックし

状況	手順
別の値を使用して証明書を生成します	<p>Click the *Update the Current Certificate Attributes* option.</p> <p>新しい値を入力しない場合は、[共通名] フィールドと [代替名] フィールドに既存の証明書の値が使用されます。他のフィールドには値は必要ありませんが、証明書に値を入力する場合は、たとえば、市区町村、都道府県、国などの値を入力できます。</p> <p> 証明書の代替名フィールドからローカル識別情報を削除する場合は'ローカル識別情報を除外(localhostなど)チェックボックスをオンにしますこのチェックボックスをオンにすると、[代替名] フィールドに入力したフィールドのみが使用されます。空白のままにすると、結果の証明書に代替名フィールドがまったく表示されなくなります。</p> <p>[+]</p>

4. [はい] をクリックして証明書を再生成します。
5. 新しい証明書を有効にするために Unified Manager サーバを再起動します。

完了後

HTTPS 証明書を表示して新しい証明書の情報を確認します。

Unified Manager 仮想マシンを再起動しています

仮想マシンは、Unified Manager のメンテナンスコンソールから再起動できます。新しいセキュリティ証明書を生成した場合や仮想マシンで問題が発生した場合、仮想マシンの再起動が必要になります。

作業を開始する前に

仮想アプライアンスの電源をオンにします。

メンテナンスコンソールにメンテナンスユーザとしてログインします。

このタスクについて

[ゲストの再起動]オプションを使用して、vSphereから仮想マシンを再起動することもできます。詳細については、VMware のドキュメントを参照してください。

手順

1. メンテナンスコンソールにアクセスします
2. システム構成 > 仮想マシンの再起動 * を選択します。

Linux システムで Unified Manager ホスト名を変更する

必要に応じて、 Unified Manager をインストールした Red Hat Enterprise Linux または CentOS マシンのホスト名をあとから変更することができます。たとえば、タイプ、ワークグループ、監視対象のクラスタグループなどがわかるような名前に変更すると、 Linux マシンのリストで Unified Manager サーバを識別しやすくなります。

作業を開始する前に

Unified Manager がインストールされている Linux システムへの root ユーザアクセスが必要です。

このタスクについて

Unified Manager Web UI には、ホスト名（またはホストの IP アドレス）を使用してアクセスできます。導入時に静的 IP アドレスを使用してネットワークを設定した場合は、指定したネットワークホストの名前を使用します。DHCP を使用してネットワークを設定した場合は、 DNS サーバからホスト名を取得します。

ホスト名を変更した場合、 Unified Manager Web UI へのアクセスに新しいホスト名を使用するには、ホスト名の元の割り当て方法に関係なく、必ず新しいセキュリティ証明書を生成する必要があります。

ホスト名ではなくサーバの IP アドレスを使用して Web UI にアクセスする場合は、ホスト名を変更したときに新しい証明書を生成する必要はありません。ただし、証明書のホスト名が実際のホスト名と同じになるように証明書を更新することを推奨します。新しい証明書は、 Linux マシンを再起動するまで有効になりません。

Unified Manager でホスト名を変更した場合は、 OnCommand Workflow Automation （ WFA ）でホスト名を手動で更新する必要があります。ホスト名は WFA では自動的に更新されません。

手順

1. 変更する Unified Manager システムに root ユーザとしてログインします。
2. 次のコマンドを記載された順序で入力して、 Unified Manager ソフトウェアと関連する MySQL ソフトウェアを停止します。

```
sudo systemctl stop mysql
```
3. Linux を使用してホスト名を変更します `hostnamectl` コマンドを実行します `hostnamectl set-hostname new_FQDN`

```
sudo hostnamectl set-hostname nuhost.corp.widget.com
```
4. サーバの HTTPS 証明書を再生成します。 `/opt/netapp/essentials/bin/cert.sh create`

```
/opt/netapp/essentials/bin/cert.sh create
```
5. ネットワークサービスを再起動します。 `service network restart`

```
sudo service network restart
```
6. サービスが再起動したら、新しいホスト名で `ping` を実行できるかどうかを確認します。 `ping new_hostname`

```
ping nuhost
```

元のホスト名に対して設定していたものと同じ IP アドレスが返されることを確認します。

7. ホスト名を変更して確認したら、次のコマンドを記載された順序で入力してUnified Managerを再起動します。

著作権に関する情報

Copyright © 2024 NetApp, Inc. All Rights Reserved. Printed in the U.S.このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないいかなる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を隨時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

権利の制限について：政府による使用、複製、開示は、DFARS 252.227-7013（2014年2月）およびFAR 5225.227-19（2007年12月）のRights in Technical Data -Noncommercial Items（技術データ - 非商用品目に関する諸権利）条項の(b)(3)項、に規定された制限が適用されます。

本書に含まれるデータは商用製品および / または商用サービス（FAR 2.101の定義に基づく）に関係し、データの所有権はNetApp, Inc.にあります。本契約に基づき提供されるすべてのネットアップの技術データおよびコンピュータソフトウェアは、商用目的であり、私費のみで開発されたものです。米国政府は本データに対し、非独占的かつ移転およびサブライセンス不可で、全世界を対象とする取り消し不能の制限付き使用権を有し、本データの提供の根拠となった米国政府契約に関連し、当該契約の裏付けとする場合にのみ本データを使用できます。前述の場合を除き、NetApp, Inc.の書面による許可を事前に得ることなく、本データを使用、開示、転載、改変するほか、上演または展示することはできません。国防総省にかかる米国政府のデータ使用権については、DFARS 252.227-7015(b)項（2014年2月）で定められた権利のみが認められます。

商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、<http://www.netapp.com/TM>に記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。